コミュニティ・ランゲージ・ラーニングが話技能習得に与える効果

小島一江
GLS Sprachenzentrum, David Berry Language

要旨

日本語学習者の動機の多様化に伴い、会話や発音に重点を置くシラバスが必要になってきている。そのため、コミュニティ・ランゲージ・ラーニングとこの教授法を用いて話技能習得への効果を伴った実践例を紹介する。

【キーワード】 発話練習、会話体文法、即興ダイアログ、話技能習得、学習者発信型

1 はじめに

近年、ベルリンの GLS 語学学校では日本語学習者の数が増え、日本語はヨーロッパの主要 5 ヶ国語（英・独・仏・西・伊語）に続き 6 番目に受講者が多い言語となった。この語学学校が提供しているコースは、週 2 回 90 分 4 週間コース、土曜 4 回コース、それに 1 日 180 分 5 日間集中コースで、各コースとも毎月新しく始まるので、それぞれの通う学校や会社の休み期間中を利用して、ドイツ国内各地から日本語を学びに来る 3 ヶ月以内の短期学習者が約 70%を占める。学習者の主な動機として、旅行や研修や日本での駐在業務に向けた準備や日本人配偶者の家族との会話の必要性などを挙げる「日本行き学習者」が一番多く、続いて日本映画やドラマ、マンガなどのポップカルチャー言語の理解を希望する「ポップカルチャーファン」が多い。これらの目的を持つ学習者が必要とする学習内容としては、機能シラバス、聴解タスク、話技能、会話体文法（普通体、省略形等の知識）、感動詞、身振り・ジェスチャーの知識などが考えられる。しかし、初級者コースの初級教科書を用いた文型シラバスでは、上述したような目的で日本語を学んでいる学習者が必要とする会話文で多く占める普通体を用いた日常会話の導入や発話や発音に重点を置く授業は難しい。また、中級者コースの受講者には、以前に学習経験があり、一度コースを中断したが、再び学習を始める「リバイバル学習者」や他の機関での長期日本語学習者で休暇中の補習を目的とした受講者もいるが、そのほとんどが文型シラバスのみで学んでいたために、日本語能力試験 4 級以上の学習者でさえも会話体文法と会話力・発話力に乏しい傾向がある。

そこで、授業にコミュニティー・ランゲージ・ラーニング（以下、CLL）を用いたところ、学習者が望む会話体の導入とゼロ初級者に 1 回目の授業から母語話者の表現文・発音・イントネーションを刷り込むことにおいて高い成果をあげた。また、中級者で会話が不得意な学習者には発話意欲向上の効果を見せた。

2 CLL について

2.1 CLL の概要

CLL は 70 年代初めにチャールズ・A・カラン（Charles A Curran）が発案した「カウンセ

リング・ラーニング(Counselling Learning)」から発展した教授法である。サイレントウェイ、サジェストペディア、TPR などと並べられる「ヒューマニック・アプローチ（人間主義的教授法）」の一つで、学習者の安定した心理状態を重視している。英語教育では「未知の言語に対する間違いへの羞恥心のために発話できない成人学習者に考えられた教授法（Dr. Ghaith 1998）」、「学習への不安を取り除くことを目的とした教授法（Swift 2007）」と報告されている。

CLL の特徴は、扱われる内容が会話・対話に重点をおいていること、教師はファシリテイター（Facilitator）、またはノウワー（Knower）の役目であること、即興で行われる学習者発信型シラバスであること、表記なしで耳からインプットした一文を発話練習した後に録音する作業を繰り返し、最終的に再生可能なダイアログが創出できること、また、ダイアログの完成後に文字で表記するというプロセスを経ることである。

効果的なケースは、会話練習の授業、発音やイントネーションの練習や矯正、初級者の発話練習、特定・専門分野用語を必要とする授業、クラスになじめない学習者・無口な学習者を教室活動に引き込むことである（Macgilchrist 2002）と紹介されている。

CLL の条件は、2 人以上 10 人くらいのグループ、学習者が全員共通言語を持っていることのみで、必要器具はボイスレコーダーや MP3 などの録音器具である。

長所は、ダイアログの会話進行が完全に学習者の発想に頼るものであり、学習者の日常使用頻度が高い語彙や表現が学習材料となり、また、個々の発話タスクが遂行されなければダイアログが完成しないので、各タスクに高い集中度が要求され、そのため、学習の定着度が高くなる。それから、即興で作られていくダイアログの内容を学習材料にするので、学習者のレベルに関係なく取り組める。さらに、CLL を用いた事でクラスの雰囲気が良くなり、その後も授業に活気が出るようになったという事例も尐なくない。一方、短所は、新出単語・新出文法項目も多くなる会話表現を毎回授業で使うのは不向きであることだ。

2.2 CLL の手順

CLL の手順は大きく分けて、①自己紹介、②ダイアログ創出、③フィードバック、④書き起こし、⑤文法分析の五段階過程を経る（Admin 2004）。各項目については、以下に詳しい説明を記述する。

①自己紹介

席の配置は机を使わず椅子だけを使用し、ファシリテイター（以下、F）が各学習者の背後に立てるように椅子の外側と壁の間に人が通れるくらいの空間を空けて円形に並べ、学習者がお互いの顔が見えるように輪になって座る。創出されるダイアログの話題は、学習者がより関心を持ち、全員に共通するテーマが理想的なので、CLL を始める前に各学習者の自己紹介や関心のある話をして、最適な話題を探す事が大切である。またこの段階で決めた話題を用いた会話が行われる仮想関係を設定し、それに合うポライトネスの度合い（丁寧体・普通体）も決定しておく。

②ダイアログ創出

まず、ある学習者（L1[1]）が母国語（あるいは共通言語）で「話したい一文」を発する。F は L1 の背後に立ち、その文を訳した目標言語（日本語）の文を口頭のみで L1 に繰り返しインプットする。L1 は、背後から繰り返して聞こえる日本語文のように発話できるよう

に各自自由に発話練習をし、聞こえた発話文と同じように言える自信がついたら、F に「（インプット）ストップ」の指示を出し、L1 はその覚えた発話文をボイスレコーダーに録音する。その録音された文からインスパイアされて「話したい一文」を思いついた学習者（L2）が上述同様の作業を繰り返す。そして、他の学習者（L3、L4 等）も同様の作業を延べ十～二十回程繰り返すと、最終的に 1、2 分程度のダイアログができあがる。この過程は表記せず、聴覚を使い口頭のみで行われる。また、録音されたダイアログ（録音データ）は、サウンドファイルとして E メールに添付して送ることができ、学習者に配布が可能である。

③フィードバック

録音されたダイアログを続けて全員で聞き、何が話されていたか母国語で確認する。

④書き起こし

録音されたダイアログを書き起こす。表記方法は学習者によって異なり、初級者はローマ字表記で、仮名が読める学習者には仮名、または漢字表記で行う。主な書き起こし方法は、1) 同授業中に F が書き起こす、2) その場で学習者が書き出す、3) 録音データを各学習者に送り、宿題で書き出してきてもらい、次回の授業で確認する。上記 1) の書き起こし方法について、OHP を使う場合は書き起こし文を書いたシートを、復習材料として授業後そのままコピーして渡せるという利点もある（Macgilchrist 2002）が、筆者は自ら黒板に書き起こし、それと同時に学習者が各自ノートに書き写すケースが多い。しかし、この書き起こし方法は、学習者の筆記スピードに個人差があり、時間がかかりすぎる場合が多いため、まだ改善の余地が残されている。

⑤文法分析

書き起こされたダイアログ全文を分析する。分析の程度は学習者のレベルによって異なるが、主な項目は品詞分けを含む文法構造や会話体の説明や単語訳などである。時間に余裕のある時や学習者にとって余裕がある時などは応用練習などをする場合もある。英語教育の場合では、書き出した文の下に母国語（共通語）の訳だけを示し、分析も学習者が行うという程、学習者主体シラバスである（Macgilchrist 2002）。

3　CLL が話技能習得に与える効果

ここで、話技能の具体的な技能を考えてみたい。例えば、発音・イントネーションを口頭で発する**発話技術**（i）、単語や文法の知識を蓄える**記憶力**（ii）、記憶している文から応用文に発展させる**思考力**（iii）、そして、場面やコンテクストに沿った適切なことばを選ぶことができる**ことばの選択力**（iv）などではなかろうか。それに加えて、外国で日本語を学び、日本語をあまり話す機会がない学習者には**発話意志**（v）も話技能の一つだと仮定すると、CLL は上述した各項目に貢献した結果となった。その根拠を提示すべく [2]、以下に四つの CLL 授業例を紹介する。学習者について、ゼロ初級者には名前の横に「*」を付けた。また、各授業例の授業記録と筆者のコメント、各授業に参加した学習者からの感想をダイアログ下方に記述した。

3.1　授業例 1 ＜発話練習の例＞ 初級クラス 1 回目の授業

学習者；ゼロ初級者 3 名［K*（女性）、J*（男性）、C*（男性）］動機；3 名とも日本人の知り合い（子供を含む）との会話目的希望；文字は必要なく会話練習を希望

背景；初めての授業ということで開始前は緊張した様子

話題；普通体を用いた会話体で「初めて出会って何かをする」という話題を設定書き起こし表記方法；ローマ字表記

ダイアログ内容（完成までの時間 45 分）；

K：こんにちは。名前は何？
C：コートニー。今日は元気？
K：元気だよ。コートニー君は？
C：うん、元気だよ。
J：ああ、こんにちは。ぼくはヨルグです。名前は何？
K：カルメラです。よろしく。
C：ぼくはコートニーです。よろしく。
J：こちらこそ。
C：今日は何をしようか。
K：日本語を勉強しよう。
J：あー、いいね。
C：じゃあ、たぶん、ぼくも。
K：ドキドキする。むずかしいかな？
J：大丈夫だよ。むずかしくないよ。
C：日本語、勉強したことある？
J：ないけど、好きだよ。
K：えー、どうして？
J：だって、ドイツ語と全然ちがうから。
C：ぼく、新しいこと、好き。楽しみだな。
K：私も、楽しみ。
C：じゃあ、始めよう。
J：そうしよう。

この授業例 1 では、発音・イントネーション、日常会話頻出単語、挨拶や相槌の導入 [3] と、文法構造の概要、会話体特有の省略形の説明、また、後の学習で導入される文法項目へのイントロダクションが可能であった。それから、最初に緊張していた様子の 3 名が授業後には打ち解け、クラスの良い雰囲気作りに貢献した。

この活動を通じての学習者の主な感想は、「日本語が話せて楽しかった」「発音が難しかった／簡単だった」「知りたかった大切な語彙が習えた」「驚く声「えー？」が（ドイツ語と）違う事に驚いた」「言葉をよく省略する日本語会話の雰囲気を味わえた」「「ぼく」と「わたし」の違いを知った」「大まかな文法構造が分かった」ということであった。

3.2 授業例 2 ＜レベルに差がある初級者クラスの例＞ 初級クラス 1 回目の授業

学習者；初級者 6 名〔M*、K*、C（女性）、Y*、X、A（男性）〕
動機；日本行き学習者（M*、C）、ポップ言語理解希望（A、K*）、配偶者が日本人（Y*）、リバイバル学習者（X）
希望；5 名が会話練習を希望で、1 名はそれに同意
背景；初級者クラスでも、個人学習やアニメを見て日本語に触れている学習者 3 名とゼロ初級者 3 名の混合クラス
話題；3 名（K*、Y*、X）が日本旅行経験者で、1 名（M*）が旅行準備のため、丁寧体を用いた会話体で「日本旅行」という話題を
設定書き起こし表記方法；ローマ字表記

ダイアログ内容（完成までの時間 60 分）；

M*：こんにちは。元気ですか？
K*：はい、元気です。日本に行きましたか？
A ：いいえ、ぼくはまだです。カトリンさんは？ C ：はい、行きました。
X ：日本のどこに行きましたか？Y*：東京と函館に行きました。M*：どうでしたか？
X ：すばらしかったです。
C ：何を見ましたか？
Y*：浅草を見て、銭湯に行きました。
A ：銭湯はどうでしたか？お湯は熱かったですか？
X ：熱いお風呂と冷たいお風呂がありました。K*：熱いお風呂にどのぐらい入っていましたか？
C ：10 分ぐらいがんばりました。その後でおいしいご馳走を食べました。M*：おいしかったですか？
X ：おいしかったですが、納豆はちょっと…好きじゃないです。
Y*：へ？本当ですか？ぼくは好きですよ。でも、するめはあんまりおいしくないです。K*：じゃあ、味噌汁は？
A ：おいしかったですよ。日本の料理は 興味深いです。

この授業例 2 では、授業例 1 に変述した内容に加え、「きらい」を使わず「好きじゃない」という日本人的表現や終助詞の「よ」を実際の会話進行の中で導入することが可能であった [3]。印象的だった事は、ダイアログ創出途中で K*が提案した「話したい内容」について X が知っている限りの単語を並べて日本語文構築を手伝おうとしていた事 [4]、日本旅行経験者である Y*、C が日本での（納豆・銭湯・温泉等についての）体験談を語り、日本文化について情報交換がなされた事、また、文法分析過程では文法構造を知っている A がまだ知らない M に説明をして教えた事など、コミュニティ（共同体）としての学習姿勢や情報交換が可能であった。

この活動を通しての学習者の主な感想は、「良かった／楽しかった」「教授法が興味深かった」「日本の文化（納豆、銭湯）について分かって面白かった」「動詞、形容詞の活用が

わかった」ということだが、漫画読解希望の K*は「文型シラバスの方がいい」という意見であった。

3.3 授業例 3 ＜専門用語希望者の例＞ 中級クラス 2 回目の授業

学習者；中級者 2 名〔O（女性、学習歴 2 年）、日本短期留学 2 回、会話に問題はなく、発話は意欲的だが、尖々アクセント有。S（男性）；リバイバル学習者で 3 年前に 1 年間の学習経験有。現在、日系企業に勤務。発音・発話・聴解に自信がなく、意欲も尖なく、発話がぎこちない。〕

希望；S が販売専門用語を希望、O は同意

背景；教科書の進度は『みんなの日本語』第 26 課。両者共、発音（特にラ行）に母語の介入有、漢字 100 字程度習得

話題；S が販売分野の語彙を希望しているため、「MP3 を買う客と店員」という話題を設定

書き起こし表記方法；ダイアログ下記参照

ダイアログ内容（完成までの時間 50 分）；

S：ドイツのアダプターもありますよ。
O：そうですか。で、容量はどのぐらいですか。
S：4 ギガバイト、8 ギガバイト、16 ギガバイトがあります。
O：4 ギガバイトでいいです。他の色がありますか？
S：はい、あります。
O：赤いのがありますか？
S：申し訳ございません。只今、品切れで注文になるんですが…。
O：どのくらいかかりますか？
S：2、3 日かかります。
O：あ、そうですか。じゃあ、3 日後にまた来ます。ところで、いくらですか？
S：定価は 10000 円ですが、10%割引で、9000 円でいいですよ。
O：いいですね。3 日後は土曜日ですね。土曜日は何時まで開いていますか？
S：土曜日は 8 時まで開いています。
O：じゃあ、取り置きをしておいてください。
S：はい、わかりました。こちらに名前と電話番号を記入してください。
O：はい、書けました。
S：こちらをお持ちください。
O：はい。
S：土曜日にお待ちしています。
O：よろしくお願いします。
S：ありがとうございました。

この授業例 3 では、母語が介入していた発音・イントネーションの矯正練習と [2]、会話体の表現に加え、販売用語や顧客への敬語の導入が可能であった。また、ダイアログ中の新出文法「んです（26 課）」、「書けます（27 課）」、「開いています（29 課）」、「ておいてく

ださい（30 課）」」が、教科書『みんなの日本語 2』の予習にもつながった。そして、漢字の読み練習のため、聞き取り書き起こし作業を宿題に出し、次回の授業に漢字混じり文で表記した書き起こし文を用意して、振り仮名をつける課題を課した。

この活動を通しての学習者の主な感想は、「たくさん話せて楽しかった（O の感想）」「仕事に必要な語彙を学習できた（S の感想）」「敬語構造が知れて良かった（S、O の感想）」などであった。特に S は「話す調子をつかめた」という感想を残し、これ以後、発話が意欲的になった [5]。

3.4 授業例 4 ＜レベルに違いがある学習者混合クラスの例＞ 初級クラス
学習者；3 名［I（女性、日本語学習暦 2 年）、L*（女性）、B*（男性）］動機；携帯電話関係の会社で、社長の意向で会社研修
背景；I は去年の JLPT4 級合格者で単文発話は可能、この日は日本語に興味のあるゼロ初心者 2 名が見学を兼ねて飛び入り参加
話題；前日にパーティーがあり授業を行っている研修室が散らかっていたため、「その状態で今から何をするか」という話題を設定
書き起こし表記方法；ローマ字表記

ダイアログの内容（完成までの時間 40 分）；

B*：こんにちは。
L*：こんにちは。
I：あっ、こんにちは。昨日はよく寝られましたか？ L*：はい、よく寝ました。バスティさんは元気ですか？ B*：はい、元気です。わっ、ここ、汚いですね。L*：そうですね。それにくさいですね。I*：じゃあ、窓を開けましょう。掃除もしなきゃ。B*：そうですね。でもまず、朝ごはんを食べませんか。L*：そうですね。コーヒー、飲みたいです。I*：いいですね。私はお茶を飲みます。バスティさんは何を飲みますか？ B*：じゃ、オレもお茶ください。

I：どうぞ。B*：
どうも。
I：どういたしまして。
L*：じゃあ、誰か、パンを買ってきてください。B*：おれは自転車がないから… L*：私はくつがないから、行きません。
I：じゃあ、私？

この授業例 4 では、授業例 1 で変述した項目と同様の項目が可能であり、この活動を通じての学習者の主な感想は、「楽しかった」「日本語の発音は意外と簡単だった」「日本語の感じがつかめた」「日本語は興味深い」ということだった。

この授業例 4 は極めて稀な例だが、日本語学習暦 2 年の I よりもゼロ学習者 L*と B*の

方が日本語の母語話者に近い発音とイントネーションを習得できていた事[2]がとても印象的であった例という理由で、ここに紹介した。

4 最後に

CLL の授業が発音・イントネーションの刷り込みと学習内容の記憶に関して大きな成果をあげたことは、数ヶ月経ってもその時に参加していた学習者が授業の時と全く同じ発音・イントネーションで発話しているのを耳にすることが何度もあることから分かる[6]。筆者はこの教授法を短期コースのコースデザインの一部として用いたが、学習内容が単発的であり、学習者が学習の達成感を得られやすいという CLL の個性から、今後は長期学習クラスでも有効的な用い方が検討できよう。そして、会話の授業にはとりわけ効果のある CLL が日本語の授業で用いられる機会が増えて行くことを期待し、そのために、より有効な CLL ファシリテイターとしての役割を検討していくことが今後の課題である。

注.

[1]任意の学習者の意味で、英語表記「Lerner」の頭文字をとって L とし、異なる学習者の意味で L1、L2、L3、L4 とした。

[2]発表で公表した音声データは、http://www.nihongo-no-wa.de/cll.htm にアップロードした。3 で挙げた**発話技術**（i）の習得に貢献したという説はこの音声データを根拠とする。

[3]この相槌や終助詞の導入は 3 で挙げた**ことばの選択力**（iv）に貢献した例とする。

[4]この学習者の学習態度は 3 で挙げた**思考力**（iii）に貢献した例とする。

[5]この学習者の例は 3 で挙げた**発話意志**（v）に貢献した例とする。

[6]この事実は、と 3 で挙げた**記憶力**（ii）に貢献した例とする。

＜参考文献＞

小林ミナ（2005）「コミュニケーションに役立つ日本語教育文法」『コミュニケーションのための日本語教育文法』野田尚史（編）, pp. 21-41, くろしお出版.

水谷信子（1985）『日英比較　話しことばの文法』くろしお出版.

水谷信子（1999）『心を伝える日本語講座』研究社出版.

山内博之（2005）『OPI の考え方に基づいた日本語教授法』ひつじ書房.

Macgilchrist, Flyss (2002) Community Language Learning. *English Teaching Matters* 3:6-9. Scrivener, Jim (2003) Idea for working with connected speech. *Berlin ELTABB Lec Handout*:2-3. British Council. Community Language Learning:
http://www.teachingenglish.org.uk/think/articles/community-language-learning (30.3.2009)

Charles, Paul. Encouraging students to speak:
http://www.onestopenglish.com/section.asp?docId=154596 (19.6.2008)

Dr. Ghaith, Ghazi. Community Language Learning:
http://members.fortunecity.com/nadabs/communitylearn.html (28.9.2008)

Maley, Alan. Community Language Learning:
http://www.onestopenglish.com/section.asp?catid=59430&docid=146410 (24.4.2008)

Swift, Sue. An ELT Notebook:
http://eltnotebook.blogspot.com/2007/02/community-language-learning-part-one.html (20.3.2009)